

O'Neill 海洋一幕劇研究

— Glencairn 号の人々 —

山本悦子

Eugene O'Neill (1888–1953) の初期の一幕物, “Bound East for Cardiff” (1914), “The Moon of the Caribbees” (1917), “The Long Voyage Home” (1917), “In the Zone” (1917) は, 船乗りとしての経験を生かして書かれた海洋一幕劇である。これら S. S. Glencairn plays と呼ばれる一連の作品では, 海に運命を支配される Glencairn 号の乗組員たちの抱き続ける夢や挫折, 孤独が描かれている。乗組員たちは, 背後に絶えず存在する海から逃れようとするが, 決して逃れることはできない。それは, 人生における不可思議な力, あるいは, 運命とも呼べるものがそこにあるからである。海はまさに O'Neill が終生追求し続けた「背後の力」の象徴である。「背後の力」については O'Neill 自身次のように述べている。

I'm always acutely conscious of the Force behind—(Fate, God, our biological past creating our present, whatever one calls it—Mystery certainly)—and of the one eternal tragedy of Man in his glorious, self-destructive struggle to make the Force express him instead of being, as an animal is, an infinitesimal incident in its expression. (Quinn vol. 2, 199)

乗組員たちは逃亡しようとするほど, 海に捕われてしまう。乗組員たちの海との戦いは, 彼らを支配する「背後の力」との闘争である。

“Bound East for Cardiff” の Glencairn 号は, 霧の夜, Cardiff へ向けて航海している。船倉へ転落して瀕死の重傷を負った水夫 Yank が, 寝棚に横たわり, 哀れで孤独な船乗りの生活を次のように話す。

This sailor life ain't much to cry about leavin'—just one ship after another, hard work, small pay, and bum grub; and when we git into port, just a drunk endin' up in a fight, and all your money gone, and then ship away again. Never meetin' no nice people; never gittin' outa sailor town, hardly, in any port;

travellin' all over the world and never seein' none of it; without no one to care whether you're alive or dead. (Cardiff 17)

側に付き添う Driscoll が, 気弱になった Yank を何とか励まそうとするが, Yank は “You mustn't take it so hard, Drisc. I was just thinkin' it ain't as bad as people think—dyin'. . . . I ain't never had religion; but I know whatever it is what comes after it can't be no worsen' this. I don't like to leave you, Drisc, but—that's all.” (Cardiff 17) と, 死が間近であることを感じ取っている。しかし, 彼は死ぬことを知っていながら, 死そのものを恐れてはいない。船乗り生活から抜け出せない Yank にとって, 死は “the promise, so to speak, of resurrection” (Skinner 42) である。この世から救い出してくれるものが死であり, 今や死さえ慰めなのである。

そんな Yank にも夢があった。“It must be great to stay on dry land all your life. . . .” (Cardiff 17) と, 陸での生活に思いを馳せる彼は, 陸に憧れを抱き, 船乗りをやめて農場を買うことを夢見ていたのである。Yank と Driscoll は互いに同じ夢を抱いていたことを知るが, 時は遅すぎた。これまで秘めてきた夢を告白することは, もはや手遅れであるという Yank 自身の挫折の表れであり, この世での夢を諦め, 救いとして見出した死を受け入れようとしている。

死の影は確実に Yank に忍び寄り, 彼は “How'd all the fog git in here?” (Cardiff 18) と, 霧の幻覚を見る。ここで霧は, 死という未知の世界への不安や恐怖との戦いを象徴している。彼がこの世からの救いであると信じている死こそ, 目の前に広がる霧なのである。生の先にある死が Yank の考えるような慰めであるという保証はない。確かに霧の向こうは晴れているかもしれないが, 見通しのきかない霧の中へ歩を進めることは, 大きな不安を伴い, 覚悟を必要とするに違いない。深い霧の立ち込める中を進む Glencairn 号

は、先の見えない人生を手探りで進まなければならない人間の姿と重なる。

意識が薄れていく中、Yank は過去の航海を振り返る。死期を悟り、覚悟ができていくに見える Yank だったが、かつて正当防衛で殺人を犯したことを思い出し、神に罰せられるのではないかという不安を口にする。彼は罪の意識に苛まれ、果たして本当に救いが自分の身に訪れるのかどうか、神の裁きを恐れているのである。“You don't think He'll hold it up agin me—God, I mean?” (Cardiff 20) と不安を拭い切れない Yank は、“If there's justice in hiven, no!” (Cardiff 20) という Driscoll の強い言葉に慰められる。

神の裁きに対する Yank の恐れや不安は、彼の信仰心から生じたものではない。死に慰めを見出している Yank が死の恐怖に駆られるのは、孤独感に襲われているからである。水夫部屋に取り残されることを嫌がる Yank は、“Don't leave me, Drisc! For God's sake don't leave me alone!” (Cardiff 13) などと Driscoll に訴え、しきりに “Don't leave me, Drisc!” と繰り返す。自分に無関心に鼾を掻いて眠っている仲間たちの中で、死を前にした Yank を襲う孤独感は一層強くなる。そのため、“I ain't no coward, but I'm scared to stay here with all of them asleep and snorin'.” (Cardiff 14) と、孤独に対する恐れを露わにしているのである。死は孤独との戦いであると言える。Yank は死の不安とひとりで戦わなければならない。そんな彼を見守ってくれる Driscoll の存在は、心細い Yank にとって何よりの力、心の支えとなったであろう。Yank が最後に思い出すのがバーの女のほんの些細な親切であったことは、彼の孤独の深さを観客に強く印象づけているが、心配してくれる身内もなく、孤独な船乗り人生を送ってきた Yank にも、実はこの世での支えとなるものがあつた。友情が彼に生きる力を与えてきたのである。“There ain't much in all that that'd make yuh sorry to lose it, Drisc.” (Cardiff 17) と行って、この世の生に未練を見せなかった荒くれの Yank が、仲間に対する思いやりを示すのは、友情が彼の人生における力であったことを認めた瞬間だったかもしれない。

友情によって生きる力を与えられてきたからこそ “It's hard to ship on this voyage I'm goin' on—alone!” (Cardiff 21) と、この上ない孤独に襲われる Yank は、孤独や死の恐怖に耐え、その結果死を受け入れる。Yank の命が絶えた時、外の霧が晴れる。“I wish the stars was out, and the moon, too; I c'd lie out on deck and look at them, and it'd make it easier to go—

somehow.” (Cardiff 21) と Yank は望んだ。星と月だけが死という孤独な航海の針路を示し、Yank を導いてくれる。

自分の運命を支配する海を呪い、そこから逃亡することを切望する Yank にとって、死さえも救いであった。死こそが海からの解放であると考えたのである。それでも、この世で何とか海から逃れるべく、Yank は陸に埋葬されることを望み続けた。それは海に対する最後の抵抗であった。しかし、航海中の死者は水葬されるのが海の掟であるがゆえに、彼のこの望みは叶えられることはなく、海と縁を切ることはできない。陸への憧れ、叶うことのない希望を抱き続けた Yank は、海にとって反抗者である。海に挑もうとする者を海は決して許さない。海に象徴される、運命を支配する「背後の力」から逃れようとするほど、海という魔手に捕らえられてしまうのである。

“The Long Voyage Home” の Olson もまた、人間に影響を及ぼす大きな力の象徴である海から逃れることのできない人物である。2年間の契約を終えて給料を手にした Glencairn 号の乗組員たちが、すっかり酔っ払ってロンドンのパブへやって来る。ただ一人まったくの素面なのが、母親の待つ故郷に帰るつもり of Olson である。

故郷に戻る意志を持つ彼を、口の悪い Cocky は “There's a funny bird of a sailor man for yer, Gawd blimey!” (Long Voyage 11) と嘲っているものの、祝福する気持ちがないわけではない。激しやすい面もあるが思いやりのある Driscoll は “I only wisht I'd a mother alive to call me own. I'd not be dhrunk in this divil's hole this minute, maybe.” (Long Voyage 11) と、自分が果たせない夢を Olson に託すかのようにである。Driscoll 自身も切に海を離れたがっており、“Bound East for Cardiff” では、Yank と二人で農場を手に入れる夢を打ち明けている。“The chance of release is always there for the spirit brave enough to battle for it.” (44) と Skinner が言うように、実際には海は完全に閉ざされた空間ではない。しかし、Driscoll はその意志を行動に移す気配がない。海から、すなわち運命から逃れることは不可能であると悟ってしまっているのである。その点では、彼もまた海という背後の見えざる力に支配された、運命の犠牲者であると言えなくもない。

そんな Driscoll とは違って、Olson は自分の望みを叶えるために、強い意志を持って行動する。

... I mean all time to go back home at end of voyage. But I come ashore, I take one drink, I take many drinks, I get drunk, I spend all money, I have to ship away for other voyage. So dis time I say to myself: Don't drink one drink, Ollie, or, sure, you don't get home. And I want go home dis time. I feel homesick for farm and to see my people again. (Long Voyage 23-24)

これまで酒を飲んで金を使い果たしてきた彼だが、今回こそは故郷へ帰ると固く心に決めて、一旦飲み始めると止まらなくなるという酒を断っているのである。運命付けられた海での生活から逃れようとする願望が、意志を持った行動になった時、海に対する敵意の現われとなる。Yank の陸への憧れ、家庭を持つ夢は、儂い幻想であった。再び陸を見ることも、埋葬さえも Yank に許さなかった海が、この反逆者をどのように扱い罰するのか。

皆が酒を飲む中、Olson は酒を口にすることなく過ごす。“No more sea, no more bum grub, no more storms—just nice work.” (Long Voyage 18) と売春婦の Freda に話し、故郷へ帰る夢の実現はすぐそこまで来ているように思える。そんな時、Olson を残して、仲間たちは泥酔した Ivan を宿へ送って行く。一人残された Olson は、誘拐周旋業者 Nick らに、船の欠員補充のための標的とされる。睡眠薬入りの飲み物を飲まされた彼は意識を失い、農場を買うための蓄えをすべて奪われて、船へと連れ去られて行く。

陸へ降り立った Olson を、海は逃がさなかった。悪意に満ちたパブの経営者 Fat Joe や Nick らは、まさに海の手先としての役割を果たしている。すっかり酩酊状態になった、思慮のない愚かな Ivan に、Olson は足を引っ張られたとも考えられる。海は人間を利用して、海から抜け出すという望みの実現を阻止し、自らの手中に収めたと言える。

そもそも Olson は失敗する運命にあった。“All are dressed in their ill-fitting shore clothes and look very uncomfortable.” (Long Voyage 8) というト書きは、海に捕らわれた船乗りたちにとって、陸が異質な世界であることを示唆している。Olson は海の所有物であり、海に縛られ、決してそこから離れることはできないであろう。Olson が連れ去られて引き渡されるのは、皮肉にも、“Py yingo, I pity poor fallers make dat trip round Cape Stiff dis time year. I bet you some of dem never see port once again.” (Long Voyage 26) と言った、悪名高い Amindra 号である。

海に象徴される運命の前に屈さざるをえない乗組員たちは、陸こそ自分の生きる場所であるはずだという幻想を抱き、海の世界で自滅していく。“It's as good a place as any other, I s'pose—only I always wanted to be buried on dry land.” (Cardiff 21) と Yank が言うように、船乗りたちは海に自らの人生があることを理解している。しかしながら、海に閉じ込められているという意識が、彼らに海に対する相反する感情を抱かせ、外の世界が彼らの憧れの対象となる。船乗りたちは、その憧れによって今いる世界への嫌悪を引き起こされ、そこから逃れようとあがくことになるのである。

別の場所へ行けば幸せになることができるのではないかという期待や夢を持つことは、現実の悲惨さを忘れさせてくれる方法である。希望を持ち続けることで、人間は生きていくことができる。しかし同時に、耐え難い現実と実現しない夢、希望と絶望との間で、さまざまな葛藤が生まれる。それはやがて、自己存在の確立を求めるが、どこにも belong する場所を見つけることができない状況での苦悶となる。

“The Moon of the Caribbees” と “In the Zone” に登場する若いイギリス人水夫の Smitty は、陸での辛い現実からの逃げ場として海を求めた。しかし、海の世界は、陸から逃れてきた彼を苦悩させる。明らかに育ちが良く、教育もある Smitty は、仲間たちから「公爵」と呼ばれ、他の粗野な乗組員たちとは対照的である。海に自らの所属すべき場所を求めようとするものの、到底そこは紳士である Smitty のいるべき世界ではなく、どこにも居場所を見出せずに苦しむ。

“The Moon of the Caribbees” では、満月が白々とした光を投げかける、カリブ諸島のある島に停泊中の Glencairn 号に、陸から黒人の物悲しい歌声が聞こえてくる。絶えず聞こえてくる哀調を帯びた調べに、乗組員たちの心は乱される。Smitty と Old Tom 以外の乗組員たちにとっては、それはただの肉体的苦痛でしかない。騒々しい乗組員たちをよそに、ひとり物思いに耽る Smitty は、“I wish they'd stop that song. It makes you think of—well—things you ought to forget.” (The Moon 8) と、物悲しい歌によって呼び覚まされた記憶に取りつかれ、苦しんでいるのである。鈍い感性しか持たない乗組員たちとは違い、Smitty の苦悩の種は肉体的というより精神的なものである。

乗組員たちが去って静かになった甲板で、Smitty は Old Tom と語り合う。Old Tom は Smitty を悩ませる

物悲しい黒人の歌をも, “‘Tain’t sich bad music, is it? Sounds kinder pretty to me—low an’ mournful—same as listenin’ to the organ outside o’ church of a Sunday.” (The Moon 20) とする。船乗りとしての運命を受け入れた達観者であり, 現実を悟っている Old Tom は, “Queer things, mem’ries. I ain’t ever been bothered much by ’em.” (The Moon 21) と, 思い出に捕らわれて苦悩することはない。他方の Smitty は “We’re poor little lambs who have lost our way, eh, Donk? Damned from here to eternity, what? God have mercy on such as we! True, isn’t it, Donk?” (The Moon 21) と, いまだ自分の運命を受け入れることができないでいる。酒と女に快楽を求め船乗りたちの野蛮な生活を嫌悪する Smitty が, 酒を飲み, 物売り舟の女 Pearl の肩を抱く時, それは, この世界に何とか自分を belong させようという苦悩と葛藤の表れである。しかし,

Men of diverse nationalities, both the seafarers and the bums are held together not by bonds of brotherhood but by an animal-like gregariousness. They are, on the whole, doltish, quarrelsome, even treacherous. Their sensibilities, already dull, are further blunted by liquor. Their antics, like the ape’s, provoke laughter rather than pity. (Engel 10)

粗暴で人間的な感情を失いつつある乗組員たちに取り巻かれている Smitty は, 対照的に “the man of feeling, a pensive figure with an acute consciousness, lonely and life-weary” (Engel 10) である。Smitty は現実を受け入れることができない。紳士である彼に好意を持ち, 愛慕の念を抱かせるべく誘惑しようとする Pearl を彼は拒絶し, この海の世界を拒絶する。紳士である Smitty の育ちと生まれながらの性格を考えれば, 明らかに彼は船乗りに向いていない。この場所が不快でたまらないのは, ここに彼の belong するべき場所を見つけられないからである。海にこそ自分の居場所があるという希望は, 幻想に過ぎなかった。陸から海の世界に救いを求めて迷い込み, 選択を誤った Smitty は今やどこにも所属できないでいる。

所属すべき世界を求めるとは, 自己の確立を求めることである。新しい世界に自己の存在証明を探し求めようとする時, 新しい価値観を持たねばならない。それができない Smitty は, 新しい世界, 他者の中で孤立し, 疎外感を抱く。そうして, どこにも belong できない, すなわち, 自らの存在の意味を見出すことができないという不安定な状況に陥る。

Smitty をそのようにさせているのは, 他の乗組員た

ちには欠けている, 悔恨や自責の念といったものである。内省的な彼自身の性格が疎外感や自己憐憫を生み, 彼の苦悩の原因となっている。“In the Zone” では, Smitty の過去が船乗りたちによって不幸にも暴露され, 海の世界に迷い込んだ理由が明らかになる。

弾薬を積んだ Glencairn 号は交戦海域を航行中で, 乗組員たちは神経過敏になっている。そんな中, Davis は, Smitty がこそこそと黒いブリキの箱を隠すのを目撃する。Smitty のこの怪しい行動が, 乗組員たちに彼がドイツのスパイではないかという疑惑を抱かせる。彼らはその証拠を見つけ出そうと躍起になり, 容赦なく Smitty を縛り上げ, 彼の隠した箱を強引に開ける。中に入っていたのは, 爆弾ではなくラブレターだった。しかし, それでもなお, Davis は見つかったラブレターを暗号文ではないかと疑う。それは, 乗組員たちにとって Smitty は謎だらけで, 正体がわからないからである。船乗りの世界に馴染もうとせず, Smitty 自身が作り出した疎外感が, 彼を取り巻く世界との断絶を生み, 彼らのこのような行動を引き起こしたのである。

Smitty のラブレターは, 皆の前で読み上げられる。そこで初めて, 乗組員たちは Smitty の本当の名前が Sidney Davidson であることを知る。そして, “The Moon of the Caribbees” で, “My old friend in the bottle here, Donk.” (The Moon 21) と灰めかしているように, Smitty は酒を断つことができず船乗りになり, それが原因で恋人の Edith に見捨てられたことが明らかになる。酒という “black shadow” (In the Zone 29) に捕らわれ, 船乗りになって恋人の前から消えた彼は, 恋人にその卑怯さ, 臆病さを厳しく非難されている。彼自身にも深い後悔と自責の念があるため, Smitty はその手紙を読まれて, ただすすり泣くばかりである。

ラブレターを読み終えると, Driscoll はすすり泣く Smitty に歩み寄り, 腕などを縛っていたロープを切ってやる。言うべき言葉も見つからず, 皆が困惑している中, Driscoll は “God stiffen us, are we never goin’ to turn in fur a wink av sleep?” (In the Zone 33) と叫び, 明かりを消す。そこには, 傷ついた Smitty を気遣う思いやりと同情がある。

内省的で繊細な Smitty は, 粗野で感性の鈍い乗組員たちによって深く傷つけられた。しかし, それは, Smitty が選択を誤り, 向いていない世界に入り込んでしまったことが原因である。元を辿れば, Smitty の内向的な性格から生じたものである。現状を生み出して

いるのは彼の過去であり、現在も過去も、すべて彼の性格に起因している。Smitty は、その性格から生じる苦悩に耐え続けねばならない。生まれ持った性質が彼の行動を支配し、彼の人生に多大な影響を及ぼすのである。つまり、苦悩の根源となる性格を背負って生きていかなければならない彼は、生まれながらの運命の犠牲者と言える。海に自らの所属する場所を求めたが、そこは属すべき場所ではなかった。どこにも belong すべき場所を見つけれない Smitty は苦悩し、海に翻弄され続ける。

広大な海に捕らわれた卑小な存在である乗組員たち。弱く脆い人間は、希望を持たずして生きていくことはできない。しかし、どこか別の場所に belong すべき世界があると信じることは生きる希望であると同時に、現実とそこに存在する自己を認められず、最終的には、どこにも自分の属する世界を見つけれないという悲劇的運命へと導く挫折をも生み出す。個人の抱く幻想は、時に生きる希望であり、時に現実を直視する妨げとなるのである。また、belong すべき場所を求めること、言い換えれば、自己を確立し自らの存在の意味を見出すことは、果てしない探求であり、決して叶うことのない永遠の夢である。海という運命の手中にあって、圧倒的な「背後の力」に支配された人間は、ただむなしくあがき続け、やがて運命に敗れていく。たとえ勝つことができなくても、運命に挑み続けることに、O'Neill は人間の生きる意味を見出して

いるのではないだろうか。

参考文献

- Berlin, Normand. *Eugene O'Neill*. London: Macmillan Press, 1982.
- Bogard, Travis. *Contour in Time: The Plays of Eugene O'Neill*. New York: Oxford Univ. Press, 1972.
- Cargill, Oscar, N. Bryllion Fagin, and William J. Fisher, eds. *O'Neill and His Plays*. New York: New York University Press, 1961.
- Engel, Edwin A. *The Haunted Heroes of Eugene O'Neill*. Cambridge: Harvard University Press, 1953.
- Falk, Doris V. *Eugene O'Neill and the Tragic Tension*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1958.
- Manheim, Michael. *Eugene O'Neill's New Language of Kinship*. Syracuse: Syracuse University Press, 1982.
- Martine, James J. *Critical Essays on Eugene O'Neill*. Boston: G. K. Hall & Co., 1984.
- O'Neill, Eugene. *The Moon of the Caribbees and Six Other Plays of the Sea*. London: Jonathan Cape, 1923. (作品からの引用はすべてこの版による。作品名の略語とともに頁数を括弧内に記す。)
- Quinn, Arthur Hobson. *A History of the American Drama: From the Civil War to the Present Day*. Rev. ed. New York: Appleton-Century-Crofts, 1964.
- Ranald, Margaret Loftus. *The Eugene O'Neill Companion*. Westport: Greenwood Press, 1984.
- Sheaffer, Louis. *O'Neill: Son and Playwright*. Boston: Little, Brown and Company, 1968.
- Skinner, Richard Dana. *Eugene O'Neill: A Poet's Quest*. New York: Russell & Russell, 1964.